

## 「勝ち負けよりも大切なもの」

千葉市立大椎中学校3年

井藤 魁



夏はじめじめとした空気の中、体育館は選手たちの応援の熱気にあふれていた。千葉市民卓球大会、団体戦二回戦目、僕は一番目として出場した。手に汗握る大接戦で、ついに熱気をおびた試合は最終の第五セットまで突入した。流れで汗を拭きながらコーチのアドバイスト先生の気合い入れを受け、台に向かった。と同時に相手も台についた。

そして相手のサーブ。激しいドライブの連打。それに負けんとばかりに必死にカウンターをしかける。ここまできるとすでに技術というより意地と意地のぶつかり合いだった。応援は最高に達し、ついに十対九でマツチポイントをにぎった。心臓の音が急激に早くなった。今ま

であんなに元気に動いていた足もがく震えた。ここを逃すと同点で流れが相手に移ってしまう、何としてもここで点を取る。一度目をつぶり、心を落ち着かせて、高くトスをあげた。するどい相手の返球にねらいを決めて、左のコーナーにドライブを打った。やった、と一瞬思った。しかし、スコアボードは変わらない。熱気につつまれていた応援は急に静まりかえった。それはなぜだかすぐにわかった。僕が打ったボールは台のサイドか角かのもきわどい位置にいったしまったのだ。主審と副審が悩み始める。すると仲間の一人が、

「絶対に入ったよ。」

と主審に言った。すかさず相手の応援も

「絶対にアウトだ。」

と抗議した。試合の勝利がかかっていたので必死になっていたので仲間の口出しを注意することはできなかった。主審が困っていると相手が突然、主審の方へ向かった。何をするんだ、と思うとなんとこちらに自らスコアボードをめくり点数を入れてくれたのだ。僕は一瞬、信じられなかったが主審がそれを認めるとうれしさが心からあふれでてきた。応援も歓喜の渦でついに勝ったんだと実感した。相手とお互いにいい試合だったと汗でぬれた手同士でがっしりと握手をした。

相手の、自らミスをしたと言い、点数をあげたのは、とても男らしく見え、勝利がかかってあせっている自分よりもずっと大人に見えた。この試合を通して、結果や勝ち負けではなくそれ以上に大切なものがあるのだと気がついた。勝ち負けがかかっても正々堂々とスポーツを楽しむということだ。それができて初めて結果がついてくるのだ。ぼくも彼のようなフェアプレー精神を持ったいい選手になってもっとたくさんいい試合をしていきたいと思う。